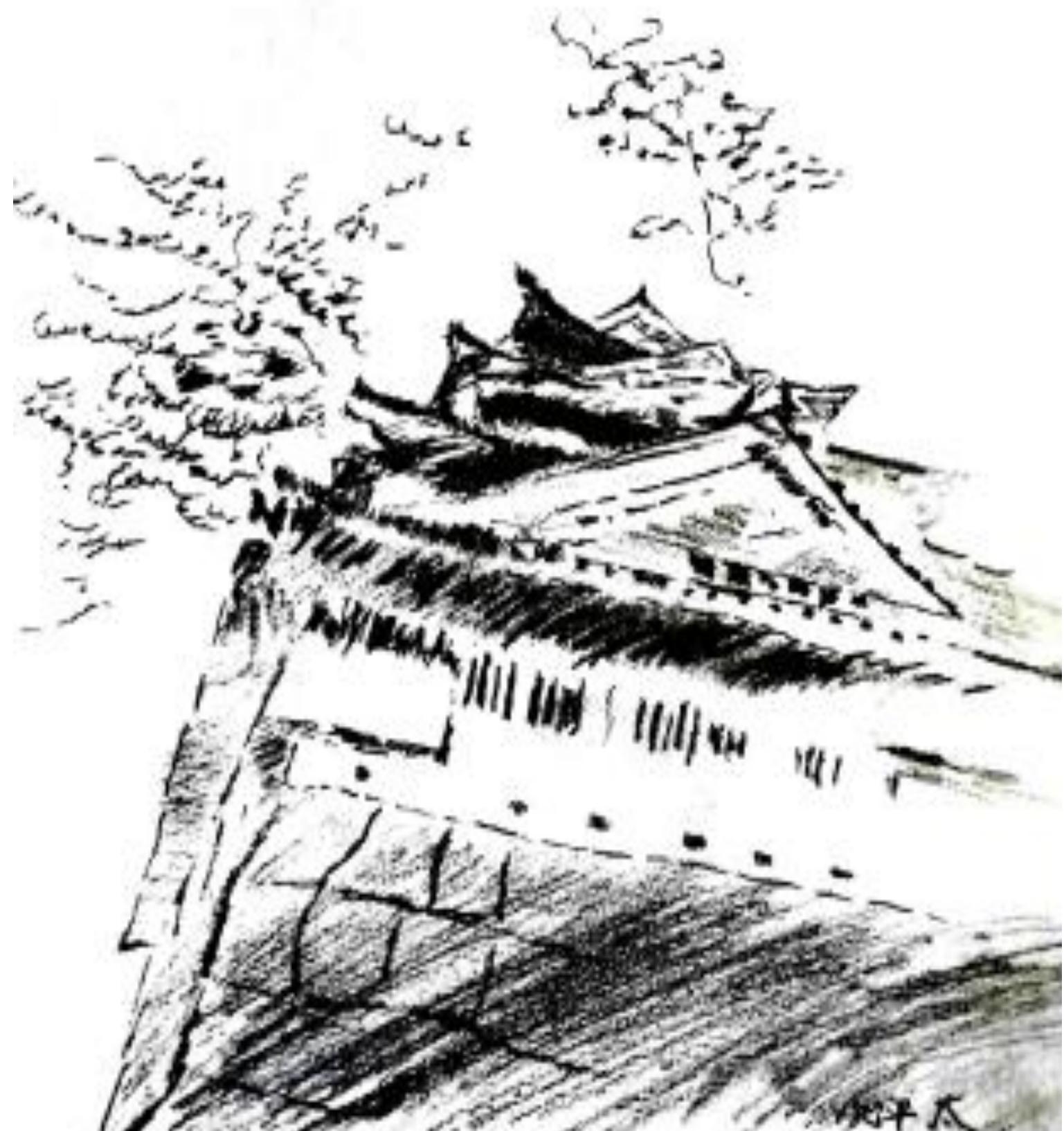


川柳天守閣

2025年12月号



第31回例会

2025年11月15日(土)

投句締切分

お題 「余白」

平川柳選

行間の余白を埋める句読点
名前だけの余白の名刺無位無冠
余裕など見ぬも輝いていた昭和
人生の余白ありがとうで埋める
長寿家系余白10年どう埋める
薄汚れ地球の余白海と空
青い空錦余白の京の庭
自分史の余白に何を書き足すか
子が巣立ち余白楽しむ土いじり山
屋根裏の余白は今日も埋められず
介護卒業戸惑う余白缶ビール
沈黙にたっぷり余白含ませる

(五客)

間を開ける開けさせまいと動く敵
遺産皆無遺言書には以下余白
青空を描こう余白はみ出して
落としてみよか心の余白紅ボトリ
愛された記憶盛つたり揺らしたり

秋田あかり
浜知子
秋田あかり

直子
佐野正邦
井澤壽峰

小林満寿夫
秋田あかり
蔵内歳重
松島きよみ
東尾由子
松谷由夏
野寿之
真鍋心平太
松島きよみ
直子

井澤壽峰

山野寿之

小林満寿夫

秋田あかり

蔵内歳重

松島きよみ

東尾由子

松谷由夏

野寿之

真鍋心平太

松島きよみ

直子

(三才)

人 土 **スケジュール余白だらけの病垂れ**
地 天 **爽やかな風が余白を吹き抜ける**
雨の午後余白を埋めに友が来る
軸 余白から愛を紡いでゆく母

林ともこ
秋山加代子
松谷由夏
平川柳

(選評) 人の句

「スケジュール」が「余白だらけの病垂れ」という句を読み、入院中なのか、病院通いをしている姿が目に浮かびました。「余白だらけの病垂れ」という比喩表現を用い作者自身の姿を鮮明に描いているところに心惹かれました。

現代川柳は、「この句のよう巧みな比喩表現を用いて作者自身の「喜怒哀楽」の感情を「吐く」短詩形文学なのです。

地の句

句を読んで、柄井川柳の『誹風 柳多留』(第六篇)に収録の「うたた寝の書物は風がくつて居る」という「古川柳」を思い出しました。「うたた寝」をしている間に「風」が本をめくつている様子を抒情的に描いていますが、この「地」の句も「余白を吹き抜ける」という抒情的な表現が用いられているところに魅力を感じました。

天の句

この句の「余白」は「雨の午後」外出できない「余白」の時間を「埋めに」作者の許に「友が来る」という小津安二郎の映画の一場面を見るかのような風景が描かれています。作者にとって「雨の午後」に「友」がわざわざ訪ねて来てくれたことに対する歓びが表現されています。

お題 「マスク」

浜知子
選

老いの顔マスク姿は良く合う	東尾由子
良い人の仮面かぶつて二枚舌	松谷由夏
マスク取りピンクのルージュ闊歩する	美代
マスクする目の鋭さが倍増す	勘兵衛
マスクして口紅いらぬ楽な朝	勘兵衛
お守りになるかな安倍さんのマスク	秋田あかり
ドクターの二重マスクにみる気配	秋田あかり
するしないマスクに視線寛容に	三枝なな
蛇を飼う甘いマスクのその下に	秋山加代子
毛羽立つたマスクを付けておじいちゃん	林ともこ
生きているようで不気味なデスマスク	井澤壽峰
永遠のマスクに10代のツタンカーメン	蔵内歳重
佳5 面影を残すマスクで逢いに来る	真鍋心平太
佳4 箱の底安倍のマスクが苦笑い	松島きよみ
佳3 足元に脱いだ仮面が落ちる夜	直子
五客)	

(三才) 佳2 淋しくないとマスク越しに言つ
佳1 マスク捨て火の鳥になり逢いにゆく

平川柳
春田敏晴

(二十九)

人
マスクでもきつとあなたを探しだす

直子
春田敏晴

(選評)

マスクでもきっとあなたを探すというこれも前向きな句。愛しい人は後ろ姿でもわかる。会えるといいですね。

地の句

本当に殿方の願望であろう。

しかし、儘ならないのが現実。触れたいと思うやわらかな唇が想像できる前向きな句は元気があつて詠み手にも血が通う。

(五客)

佳5 面影を残すマスクで逢いに来る
佳4 箱の底安倍のマスクが苦笑い
佳3 足元に脱いだ仮面が落ちる夜

天の句

百歳の深いしわ。人生のいろいろな苦難を乗り越えられた美しいお顔。きっと安らかな眠りにつかれたであらう。合掌

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

秋晴れに洗濯干して背伸びする

感情は心ブレーキ踏みしめる

一列の車中スマホのサイレント

キャベツ食われ何百匹の虫殺す

鼻先に直球投げられ四苦八苦

一本杉は静寂森を黙らせる

旅先で酔つて気分は山頭火

孫曾孫抱えきれない国債を

幻想の闇に揺蕩う海葦

夢見るは容易く叶うには遠く

魂に真珠一粒抱いている

知らない町歩く楽しき知つている

大法螺を吹いて修験の山登る

じんぐりがないと日干しになると熊

(五客)

佳5 物価高蕎麦だけ食つて年を越す

佳4 過去形の記憶何でも美しい

佳3 大きなお世話ジーンズの穴ふさぐ祖母

佳2 タイマーを使わずに炊くごはん

勘兵衛

松谷由夏

松島きよみ

小林満寿夫

青空

東尾由子

山野寿之

蔵内歳重

堀内きみ子

浜知子

浜脇蓬生

加山勝久

井澤壽峰

直子

信子

佐野正邦

美代

(三才)

人 支え合つふたり晴れたり曇つたり

地 もう誰もここにはいない未来絵図

天 イタリアのチャリ転がした俺いすこ

軸 医者になるフラックジャックになりたくて

林ともこ
秋山加代子
岩原一角
真鍋心平太

佳1 真実に手足が無くて困ります

平川柳

(選評)

人の句

支え合つことの喜びや難しさが、天気の移ろいに重ねられており、穏やかな生活感と人間味のある情緒が伝わってくる。押しつけがましくなく、さりげない温かさが良い。

地の句

未来を想像した時にふと胸をよぎる『空白の不安』が、静かに詠まれている。穏やかな今日のまま過ごしていければ良いのだが、ままならないのが人生といつものだ。

天の句

誰にもある「イタリヤのチャリを転がした」ような夢と希望にあふれた時期が気負わない語りの中に、やわらかく立ち上がりてくる。
それだけに下句「俺いすこ」が胸に沁みた。

お題 「瞬間」

互選

1点

あつと言う間だったよなうニヤクニヤク
躓いた瞬間送り足が出ず
蜘蛛の巣を瞬間に取る意地悪さ

小林満寿夫
蔵内歳重

瞬間差電車出て行く後一步
束の間の一途が生きた証です

勘兵衛
東尾由子

喝采の瞬間引退の予感

真鍋心平太
林ともこ

予防注射チクリとします顔しかめ
合掌は瞬間の美大落暉

青空
山野寿之

旧友と半日飲んだあのお酒

武智三成
松島きよみ

酔覚め開けた瞬間八つの目
揺れだした瞬間逃げだす夫ひとり

美代
三枝なな

ガード下の匂いに負けてカウンター
事故現場テレビに僕がちらつと出

加山勝久
美代

酔覚め生を感じるこの瞬間

小林満寿夫

3点

天守閣に上れば太閤秀吉に
流れ星願い事言う前に消え
一目惚れ相思相愛五十年
赤く染め沈む寸前大落暉
束の間の燈火歩く影法師

平川柳
松谷由夏
佐野正邦
青空

2点

5点

ハツとした恋ならきつとうまくいく
まだ健在祖父は瞬間湯沸し器
一秒がとつても長いパニック時
失言の瞬間に友離れ行く
一人だけ目を閉じている記念写真
この瞬間を輝いている朝の露
心臓は今今を波打つて
踏み絵した瞬間温い足の裏
その瞬間両手広げて児が立つた
君想つ瞬間海が深くなる
カメラマンその瞬間を逃さない
一瞬のよそ見運転あの世行き
瞬間のまなざし私だけ分かる
手を離し自転車乗れた親離れ
子の命天に召しますシャボン玉
一瞬の隙ついてくる不慮の事故

流れ星その瞬間に願い事
気がつくとすでに転んでいたわたし
瞬間を積み重ねての我が命
一瞬の判断で人生決まる

信子
井澤壽峰
蔵内歳重
秋田あかり

7点

直子
松島きよみ
秋山加代子
堀内きみ子
浜脇蓬生
浜知子
春田敏晴
秋田あかり
林ともこ
堀内きみ子
真鍋心平太
三枝なな
平川柳
井澤壽峰
加山勝久
信子
井澤壽峰
蔵内歳重
秋田あかり

4点

ハツとした恋ならきつとうまくいく
まだ健在祖父は瞬間湯沸し器
一秒がとつても長いパニック時
失言の瞬間に友離れ行く
一人だけ目を閉じている記念写真
この瞬間を輝いている朝の露
心臓は今今を波打つて
踏み絵した瞬間温い足の裏
その瞬間両手広げて児が立つた
君想つ瞬間海が深くなる
カメラマンその瞬間を逃さない
一瞬のよそ見運転あの世行き
瞬間のまなざし私だけ分かる
手を離し自転車乗れた親離れ
子の命天に召しますシャボン玉
一瞬の隙ついてくる不慮の事故
流れ星その瞬間に願い事
気がつくとすでに転んでいたわたし
瞬間を積み重ねての我が命
一瞬の判断で人生決まる

8点

直子
松島きよみ
秋山加代子
堀内きみ子
浜脇蓬生
浜知子
春田敏晴
秋田あかり
林ともこ
堀内きみ子
真鍋心平太
三枝なな
平川柳
井澤壽峰
加山勝久
信子
井澤壽峰
蔵内歳重
秋田あかり

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

お題 「ループ」短句

互選

1点	孫に大うけ一人あやとり 不幸の手紙ループする罪 輪ゴム繋いでゴム飛び遊び 何度も聞いてもグ一八代亜紀	青空
2点	輪と輪をつなぎ又拡がる輪 ループタイ雄三ならばよく似合い 高い高いはこれでおしまい	青空
3点	ウンウンと聞く母堂々巡り 仕上げにシユシユをピンクで勝負 グループホームで楽しく笑顔 ババ抜きのババくるくる回る	青空
4点	自らしさは輪の中にある ザイルループに山が呼んでる 堂々巡り我地理音痴	青空

4点	平和來るのか皆輪になれば 旧友四人思い出と飲む	美代
5点	メビウスの輪にあなたと二人 輪廻転生無限にループ	武智三成
6点	笑顔がつなぐ大きなループ ループタイして昭和の香り	平川柳
7点	環状線で思い出す街 水掛け論で堂々巡り	山野寿之
8点	大屋根リング夕陽飲み込む	秋田あかり
9点	無限ループの井戸端会議 夢を乗せてた回転木馬	林ともこ
10点	負のループから叫ぶ少年	信子
11点	松谷由夏 浜脇蓬生	信子
	松島きよみ 春田敏晴	松谷由夏
	春田敏晴 浜脇蓬生	浜脇蓬生
	林ともこ 春田敏晴	林ともこ
	秋田あかり 堀内きみ子	秋田あかり
	平川柳 松谷由夏	平川柳
	堀内きみ子 浜知子	堀内きみ子
	林ともこ 春田敏晴	林ともこ
	武智三成 浜知子	武智三成
	浜脇蓬生 春田敏晴	浜脇蓬生
	真鍋心平太 春田敏晴	真鍋心平太
	美代 春田敏晴	美代
	皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。	皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ㉓

民衆詩人三石勝五郎の『散華樂』と『火山灰』の韻律

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平川柳（東京川柳会主宰）

勝五郎の『散華樂』に収録されている次の「短詩」は勝五郎の代表作です。

小さく
さびしくいきる道
ただ一つほりて
この岸に蟹住めり

この四行詩に登場する「蟹」の姿には作者の自己が投影されており、そこには作者の人生観がよく表白されています。

詩集『散華樂』の「跋」で早稲田大学の恩師・

吉江喬松（一八八〇—一九四〇）教授はこの「蟹」

と題された詩を引用し、勝五郎が人間生活を「小さく／さびしくいきる道」にまで還元している

と述べています。

勝五郎の「短詩」にはこの「蟹」にみられるよう詩人の呼吸が「自然」のリズムと一体になつており、独自の詩のリズム（四／四五／五三／五二三）で構成されています。

勝五郎にこのような「内在律」の「短詩」を書く契機を与えた人物は狂歌を嗜んだ保科五無斎（一八六八—一九一二）、一燈園の西田天香（一八七二—一九六八）、アメリカの民衆詩人ホイットマン、そして川柳作家の井上剣花坊が考えられます。

勝五郎の『火山灰』にも「短詩」が多く収録されており、この詩集に収録されている「短詩」にも「川柳」にみられる「内在律」が認められます。

夕暮れが来て
花共は
白き小さき眼をつむる

この「短詩」にはホイットマンの詩を連想させる

「ポエジー」（詩情）が認められます。

また次の「短詩」の後半は剣花坊の「川柳一呼
吸詩」を彷彿される「内在律」が認められます。

若い床屋さんは

朝日の窓で

ほれた女の

顔をそる

剃刀の刃先に滑る
胸のかなしみ

この「短詩」の題は「剃刀」です。前半は「都

都逸」を思わせる「八七七五」のリズムで構成さ
れており、後半は「五七・三四」の剣花坊のいう
「川柳」の「内在律」が認められます。

『火山灰』の中で最も現代川柳に近い「短詩」
は「あこがれ」と題された次の「三行詩」です。

あこがれは

欲望の

赤きほほえみ

勝五郎はこの「短詩」の一行目で「あこがれは」
(五音)と読者に問い合わせ、二行目と三行目で「欲
望の／赤きほほえみ」(五七音)と答えていました。
このように「一呼吸」の中に「問い合わせ」と「答え」
のある「短詩」を「古川柳」では「一章に問答」
があるといいます。この「古川柳」の「一章に問
答」は次の現代川柳にも認められます。

人間を擗めば風が手に残り 田中五呂八

平和とは眠りの中に視し夢か

井上信子

無才無能の時計に毛が生る

十四世 根岸川柳

帽子を脱ぐ目と鼻がはらはら落ち

中村富二

命の水枯れて老いてゆく地球

十八世 平 川柳

(続く。)

「ブラックジャック」

真鍋心平太

先日、現役時代に勤めていた会社のOB会が三重県の湯の山温泉で開かれた。懐かしい顔がそろい、夜更けまで笑い声の絶えない宴となつた。公私ともにお世話になつたエ氏も元気な姿で参加させていた。話の合間に、大学病院に勤めておられたご子息が、このたび近くで開業されたと伺つた。

そのご子息が医師を志したきっかけを尋ねると、「小学校二年生のときに読んだ『ブラックジャック』なんだよ」と微笑まれた。あの、命を賭して人を救う孤高の天才外科医に憧れ、白衣の道を選んだという。

その話を聞いたとき、どこかギスギスした世の中の片隅に、まだこうしたまつすぐな志が息づいている——そう思うと、胸の奥が温かくなり、心が洗われる思いがして次の一句が浮かんだ。

医者になる「ブラックジャック」になりたくて

この句には、「職業としての医者」ではなく、「命を賭して人を救う者になりたい」という純粋な志への敬意を込めた。あの「ミニックを通して、少年は生きるとは何か」を感じ取つたのだろう。“志”とは、誰かに教えられるものではなく、ある瞬間に心の奥で灯る小さな火なのだ。

ふと気づけば、私の双子の孫たちも今、小学校一年生。ちょうど同じ年頃だ。来年になつたら、あの子たちにも「ブラックジャック」を読ませてみようかと思う。もしかすると、心のどこかに何かが芽吹くかもしれない。

子どもの頃に出会つた憧れを笑わず、真正面から受け止めて進む——そんな生き方こそが、人を強くし、優しくするのだと思う。

湯の山の夜風の中に、エ氏の笑顔と、ご子息のまなざしと、遠く離れた孫たちの小さな手が重なつて見える。人生というものはやはり美しい“継ぎ田”でつながつてゐるのだと、しみじみ感じたOB会だった。

第31回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「パーティ」 信子 選
「影絵」 蔵内歳重 選
「音色」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「寒」(短句) 互 選
(投句 各 2 句)

投句料 3回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。
<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。
会員登録は下記 URL より
https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから

投句開始 2025年12月9日(火)から
投句締切 2025年12月15日(月)まで
互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。
12月16日(火)～12月19日(金)
披講発表 12月20日(土)から随時閲覧可能になります。



投句・閲覧

会員登録

一〇二五年十一月二五日発行

ウェブ川柳天守閣会報

(発行責任者 真鍋心平太)
(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

携帯 TEL
fax
080-077(532)4211
(2672)4446

鉛筆画

今月はお休みします。